福羽逸人（1856～1921）は、新宿御苑の歴史において最も重要な人物の一人です。日本の近代園芸学の祖である福羽逸人は、農芸化学を学んだ後、1877年に内務省に入りました。

1886年にはブドウの栽培と醸造を学ぶためにフランスとドイツに留学し、ブドウなどのサンプルを持ち帰りました。福羽逸人は、日本国内にない果物や野菜を無加温温室で数多く栽培した日本で最初の人物でした。また大規模な異種交配を行い、自らの名を冠したイチゴ「福羽苺」など多くの新種を作出しました。1891年には宮内省御料局技師に任命され、新宿御苑とのつながりを持ち始めます。1893年には著書「蔬菜栽培法」が刊行されました。

1898年、福羽逸人は当時の新宿植物御苑の掛長に任命され、今日の新宿御苑となる大規模開発計画の実行に取り組み始めました。

1900年には万国博覧会のためにパリを訪問し、菊の大作り5鉢を展示して高い評価を得ました。パリで福羽逸人は、ヴェルサイユ園芸学校の有名教授アンリ・マルチネーに新宿植物御苑の設計案の作成を依頼しました。5年後の1906年、マルチネー教授の設計案に基づき、現在では新宿御苑と名を改めた新宿植物御苑が完成しました。その開苑式には明治天皇（1852～1912）からもご臨席を賜りました。

マルチネー教授による設計案の原本は、御苑の大半とともに1945年の空襲で焼失し、もともとの設計資料のうち残されたものはマルチネ教授が自ら描いた新しい御苑の鳥瞰図のみでした。戦後、新宿御苑はマルチネー教授の図を大きなよりどころとして再建され、現在の新宿御苑はその設計に非常に近い姿となっています。